

(No. 40)

事例名	生活バス四日市
地域	三重県四日市市
実施主体	NPO生活バス四日市（理事長 西脇 良孝）
活動要約	路線バス廃止に対して地域住民がNPO 中心に企業の協賛を得て自主財源でバスを運営し、高齢者の買い物や病院など施設への移動手段を確保
主な分野	「買物支援」
主な関係者	利用者：1日90人前後（ほとんどが60～80歳の高齢者）
キーワード	買物支援／生活バス／交通機関

### ■活動のきっかけ・経緯

- ・四日市市羽津いかるが町では、公共交通機関として三重交通バス垂坂（たるさか）線（近鉄四日市駅前～垂坂公園）が、昭和20年代より運行されてきた。しかし、利用者数減少によって、平成14年5月31日をもって廃止となった。
- ・廃止された路線の沿線である羽津いかるが町において、平成14年4月に住民を対象にアンケートを実施した結果、回答者152人では「買い物・病院へのアクセス手段がなくなるのは困る」という意見が圧倒的であり、新たな公共交通機関が必要であった。
- ・単に車を使えない、あるいは使いにくい住民の生活が充実するだけでなく、地域の新たな公共交通のニーズを開拓するという目標を掲げ、バスを利用した新しい生活スタイルの確立と地域の活性化を目指すために、「生活バス四日市」の運行に取り組み、翌平成15年4月1日から実施運行している。

### ■活動内容

- ・従来の公共交通運営の仕組みとは異なり地域住民が主体となり、地域企業等の協力(パートナーシップ)を得ながら、地域自身が求める公共交通を自分たちの手で企画・運営している。
- ・バスは39人乗り1台で、地元の交通会社に委託して運行している。

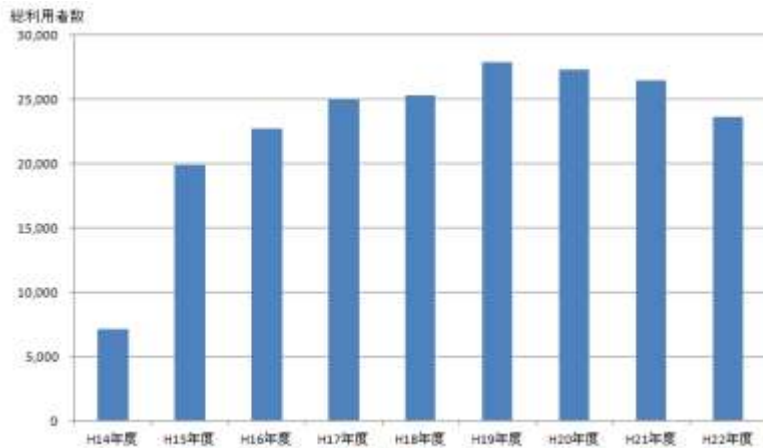


<生活バス(39人乗り)>



<西脇良孝 理事長>

- ・路線は1路線で1台のバスが往復しているために、1日に4.5往復（土、日は除く）している。
- ・月に1回市が運営する西老人福祉センターへ無料で送迎している。
- ・運賃は1乗車100円の他に回数券や1ヶ月、6ヶ月、1年の全区間フリーパス券（応援券）がある。
- ・以下に開始以来の年間総利用者数の推移を示す、1日約90人が利用している。



年度	1年間の総利用者数	1日平均の利用者数
H14年度	7,144	27
H15年度	19,868	76
H16年度	22,762	87
H17年度	24,842	96
H18年度	25,288	97
H19年度	27,911	107
H20年度	27,513	105
H21年度	26,510	102
H22年度	23,671	91

＜年間総利用者数の推移＞

- ・経費については、バス停の看板など自作し節約しているが、運賃と市からの補助金30万円、地域企業5社からの協賛金、および50万円の自主財源で賄っている。

### ■ポイント・工夫している点

- ・単に廃路線バスの運行では経費がかかるので路線にあるスーパーや商店・施設の協力を得て行っている。
- ・高齢者は利用者仲間の井戸端的な居場所（動く宅老所）として車中でおしゃべりして和やかに過ごすとともに月1回の西老人福祉センターへの無料送迎は、温泉やカラオケがあり利用者に喜ばれている。
- ・路線の延長を行い、バス停を当初21箇所から34箇所に増やし利用数の確保に努めている。



＜車内は井戸端的な（動く宅老所）＞

### ■課題と今後の展開

- ・安定した運営資金確保のために協賛事業者の継続と商店等への入会推進を行っているが厳しい。
- ・高齢者の利用に配慮して、ノンステップや車イスで乗車可能なバスの導入を行いたい。
- ・隣接する他のバス路線が廃路線になるケースがありルート変えやバス停を増やして対応している。
- ・全国に同様の課題があり数多く視察に来ている、一方行政としては一部の地域にだけの支援は公平性から対応しにくい面もあるが、生活に直結した課題なので今後有効な救済方法を検討してほしい。

連絡先	NPO法人 生活バス四日市（理事長 西脇 良孝） 住所：三重県四日市市大字羽津戊595番地 電話番号：059-361-6686 メール： <a href="mailto:sbus_yokkaichi@ybb.ne.jp">sbus_yokkaichi@ybb.ne.jp</a> <a href="http://www.rosenzu.com/sbus/">http://www.rosenzu.com/sbus/</a>
-----	---

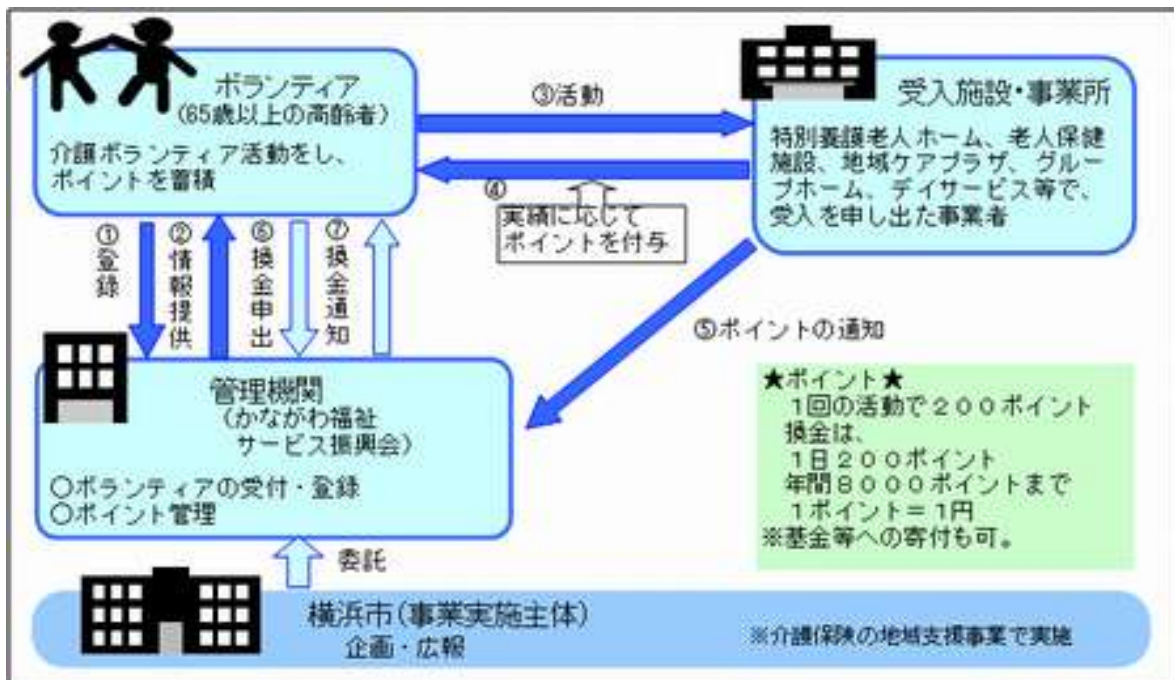
(No. 41)

事例名	「ヨコハマいきいきポイント」
地域	神奈川県横浜市
実施主体	横浜市（実施主体）、かながわ福祉サービス振興会（管理機関）
活動要約	元気な高齢者が介護施設などでボランティア活動を行うとポイントになる
主な分野	「介護・ケア」・「ボランティア」・「趣味」・「食事会」
主な関係者	登録ボランティア：5,800名（60代3割、70代6割。男女比は1：3） 受け入れ施設：277施設（地域ケアプラザ・特養・老健施設等）
キーワード	介護支援ボランティア／「横浜いきいきポイント」

## ■活動の概要

### ◆「ヨコハマいきいきポイント」

- ・「介護支援ボランティアポイント事業」は、平成19年5月に厚生労働省が高齢者の介護予防の取組として市町村が実施することを認めた事業であり、横浜市では平成21年10月から事業として実施している。「ヨコハマいきいきポイント」は、この事業の愛称である。



- ・65歳以上の横浜市民で、登録研修会を受講した人が介護支援ボランティアとして登録され、受け入れ施設と相談の上、ボランティア活動に応じたポイントがもらえる仕組みである。
- ・受け入れ施設は、特別養護老人ホーム、老人保健施設、地域ケアプラザ、グループホーム、デイサービスなどで、平成24年3月現在、277の介護施設が横浜市から指定されている。
- ・ボランティア活動の種類としては、介護施設でのレクリエーションの補助、利用者の話し相手、行事に手伝い、花の手入れ・草取り、シーツ交換などのほか、地区センターなどでの配食・会食サービス、区福祉保健センターが行う介護予防事業など多彩である。

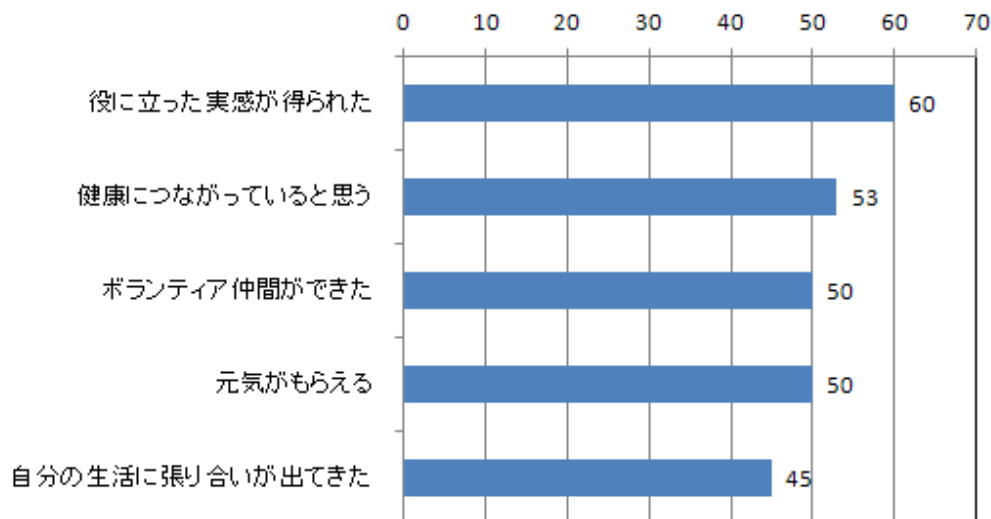


＜行事（柏餅作り）ボランティア＞



＜行事（納涼まつりボランティア）＞

- ・ 1回30分以上の活動で200ポイント、1日200ポイント、年間8,000ポイントが上限で、1ポイントが1円に換金される。特典として、プロ野球、サッカーJリーグの観戦チケットが当たることもある。
- ・ 「ヨコハマいきいきポイント」の登録者は5,800名（平成24年3月現在）。内訳は65-69歳が3割、70-74歳が4割、75-79歳が2割。男性1：女性3の比率となっている。
- ・ ボランティア活動をしてよかったこととして、以下のような項目があげられている（平成23年2月実施アンケート）。相手の役に立ったという実感に加えて、ボランティア活動する側にとっての効果が高いことが大きな特徴といえよう。



＜ボランティア活動をしてよかったこと（複数回答、%）＞

## ■具体的活動事例

### ◆「緑の郷」

横浜市青葉区の「緑の郷」（高齢者介護老人福祉施設）における介護支援ボランティア事例を紹介する。

- ・ 「緑の郷」は、1989年に社会福祉法人緑成会が事業開始した特別養護老人ホーム（100名）で、ショートステイ（4名）、デイサービス（30人ほど）、ケアマネジメント（居宅介護支援）、訪問介護の機

能も併せ持つ。

- ・ここでは、年間延べ 4,500 人の介護支援ボランティアに来てもらっている（1 日平均 10 人前後）。施設でも募集はするが、かなりの部分、自然に集まってくる。

#### ◆介護ボランティアの声

<Nさん>（男性 70 代）

- ・リタイアしてから、地域貢献したいということで地元中学校の巡回（戸締り確認）を仲間と始めた。小学生に囲碁や将棋も教えている。
- ・3 年前に、仲間を集めて「はっぴいくらぶ」という同好会（62 名、男女半々）を作り、マーじゃんや高齢者の生活支援、ぼけ防止のための運動などを行う。
- ・「緑の郷」から、横浜市の介護支援ボランティア制度を利用して施設でマーじゃん指導等をしてもらえないかと声かけられた。
- ・月 3 回程度、13 名が施設にきてマーじゃんを一緒にやる。草むしりや花の手入れは 6 人が一日おき、月 2 回のサロンにはコーヒーやお汁粉を入居者とともにだべりながら楽しんでいる。
- ・夏祭りの時は、交通整理、入居者の介助、模擬店などをやっている。
- ・たまった介護ポイントは自分の小遣いにせず、施設側に全額寄付（マーじゃん購入費用にあててもらおう）。特典で、入場券などが当たれば、それは自分で利用させてもらおう。
- ・自分は元気な体質で、これまで薬を飲んだことがないのが自慢。

<Iさん>（男性 70 代）

- ・退職後は、防災指導員のライセンスを取得、町内会長も経験。
- ・現役時代から仕事一辺倒でなく、結構、遊んでいる。営業畑で、人との会話は好きな方。
- ・介護支援ボランティアをやるようになって、いろんな方と話ができるのがうれしい。
- ・施設ではこれまでマーじゃんはなかったが、我々がくるようになってから、待ちわびている入居者も出てきた。地域の人もやってくる。
- ・指が不自由だった 99 歳のおばあさんが、マーじゃんをはじめるようになってから指先が動くようになった。したがって自動マーじゃん卓は置かない。牌の手づくりが、重要である。点数計算は頭を使う。「勝負事」はボケ防止になる。
- ・入居者と同世代なので、若いスタッフにできない話もできる。



<介護支援ボランティア>



<麻雀ボランティア>

<YAさん> (女性 70代)

- ・母親がこちらに入所していて、身の回りの世話をしていた。
- ・13年前に施設側からシーツ交換をやる人材がいらないということで、週1回シーツ交換をやらせてもらっている。
- ・昔は、「手伝ってあげている」という思いが強かったが、最近は「やらせていただいている」という風に思うようになった。今の自分が健康だからできることだ。

<Tさん> (女性 60代)

- ・2年前に、母がこちらでお世話になっていた。
- ・(重労働のため) シーツ交換の人出がいらないということで、グループで週1回活動。
- ・こちらでおしゃべりするのを楽しみのひとつ。

<YOさん> (女性 80代)

- ・長年こちらの病院で世話になった障害者の息子と夫があいついで亡くなり、一人取り残されてしまった。
- ・1年半前からこちらで洗濯ボランティア(洗濯物たたみ)を週2回(1回3時間)やらせてもらうようになった。
- ・もともと家事が好きだったが、洗濯物をたたむのが楽しい。こちらに来てから表情も明るくなり、長時間座れるようになった。息子が世話になったお返しだと思っている。

<OさんとTさん> (男性 70代)

- ・花の世話や庭の手入れを長年やっている。結構、汗をかく。体が続く限り、続けたい。

## ■課題他

「緑の郷」の担当者は、ボランティア活動受け入れについて、以下のように語る。

- ・施設側としては、もっと気楽にボランティアにきてもらいたい(先方が構えているみたい)
- ・マージャンをやっている光景をみていると、入居者とボランティアの区別がわからないようなところもある。
- ・ボランティアの方にとっては、人生の先輩である入居者から学ぶことも多いという。
- ・逆に、入居者(利用者)から元気もらっているというボランティアも少なくない。
- ・「いきいきポイント」で、孫のおもちゃを買うボランティアもいると聞く。
- ・ボランティアしたい側と受け入れ側のニーズがマッチングしないことはある。

連絡先	社団法人かながわ福祉サービス振興会 住所：神奈川県横浜市中区本町 2-10 電話番号：045-671-0294 メール：ikiiki@kanafuku.jp URL：http://ikiiki.kanafuku.jp/
-----	---

(No. 42)

事例名	NICE！藤井寺 親父パーティー
地域	大阪府藤井寺市
実施主体	社会福祉法人 藤井寺市社会福祉協議会、藤井寺市地域包括支援センター
活動要約	認知症になってもいきいき暮らせるまちづくり、地域で支える仕組み作りのために、団塊男性世代による音楽を使った各種アウトドアイベント、認知症啓発のための劇団など多方面に展開している
主な分野	「介護・ケア」・「趣味」・「まちづくり」
主な関係者	運営者：地域包括支援センター 羽根 武志 親父パーティー：50～70代を中心とした約25名（女性約半数）
キーワード	団塊世代男性／認知症／親父パーティー／バンド／アウトドア活動

### ■活動のきっかけ・経緯

- ・2007年国の認知症地域支援体制構築等推進事業を受けて始まった。
- ・藤井寺市は、2011年9月には人口67,000人弱で、高齢化率22.9%である。
- ・社会福祉法人藤井寺市社会福祉協議会、藤井寺市地域包括支援センター、藤井寺市、保健所によるコアチームを結成してモデル事業を展開した。
- ・事業開始直後に、「NICE！藤井寺」の合言葉を打ち出し、認知症の方とその家族を地域で支えるサポート体制づくりと、認知症をキーワードにした地域作りをテーマに多様な取り組みを展開してきた。
- ・「NICE！藤井寺」の取り組みとして“啓発”【キャッチコピー：(N) 認知症になっても (I) いきいき暮らせる (C) 町って (E) ええやん！「NICE 藤井寺」の設定。シンボルマークの公募。ニュースレターの発行。認知症フォーラムの開催。】、“人材育成”【認知症サポーター養成講座。住民代表者への研修。団塊世代への働きかけ（親父パーティーの立ち上げ）。専門職サポート。】“家族支援”【家族セミナー、家族の会の創設。“地域支援”【徘徊対応模擬訓練の実施】“専門職ネットワーク”【いけ！ネットとの連携（医療とケアマネのネットワーク）。専門職向け地域資源情報集の作成。】“調査”【住民意識調査】など幅広く実施。
- ・モデル事業後も、「NICE！藤井寺」を合言葉にメンバーや地域住民が主体となり活動は発展している。



<NICE!藤井寺・親父パーティーのシンボルマーク>



<親父パーティーのメンバー>

## ■活動内容

- ・「親父パーティー」は、親父のチカラでコミュニティを再活性化させる新しいグループの形である。
- ・「認知症高齢者と家族の為の日帰りアウトドア」を企画実施し、介護保険外の外出の場を提供している。
- ・「公園を親父が変える！イベント」は公園で歌ってあそぶイベントで、年に複数回実施している。地域住民が大勢集まる場を企画し、認知症の理解促進を図るとともに住民の交流促進を促している。
- ・「藤井寺市ってええやん計画」では、ゴミ拾いをしながら演奏とともにパレードを行い、認知症啓発のチラシを配布するというユニークな取り組みである。
- ・「NICE！藤井寺バンド」は、親父パーティーから生まれた新しいチカラの代表格で、定期的に集まり練習を重ね、高齢者施設や市内のお祭りに出演したり、公園でゲリラ演奏をするなど自分たちで活動の場を次々と広げている。口コミでの評判の良さで出演依頼も増加している。



<NICE！藤井寺バンドの練習風景>

## ■ポイント・工夫している点

- ・リーダーを置かない、ルールを決めないことを基本的な方針にしており、月に1度行う会議で地域包括支援センターが進行し、認知症に関わることを前提に活動やイベントの提案を出し賛同したメンバーが実施するために、活動テーマによりグループの枠を超えてメンバーの出入りがある。
- ・地域包括支援センターは、ファシリテーターとしての役割を担うが、メンバーから出る自由な発想を形にすることで、住民主体のまちづくりを支援している。認知症は地域全体の課題であり、様々なボランティアグループが得意分野で認知症に関われるよう調整を行っている。グループの活動そのものには触れず自主性に任せていることで、自分たちの町を自分たちで作る意識が高まっている。
- ・各活動は、楽しいことしか行わない、楽しいと思ったことはなんでもやってみる姿勢で取り組みを実施するフットワークの良さがあり、メンバーへの連絡はメンバー間の連絡網で行っている。

## ■課題と今後の展開

- ・誰もが認知症になってもいきいき暮らせる町にする為には、まずは自分たちが楽しむ事が大事！メンバーそれぞれが思う存分楽しんで大好きな町で活動（生活）していきたい。

連絡先	社会福祉法人 藤井寺市社会福祉協議会 藤井寺市地域包括支援センター 住所：〒583-0035 大阪府藤井寺市北岡 1-2-8（藤井寺市立福祉会館内） 電話番号：072-937-2641 メール：fureai@silver.ocn.ne.jp
-----	--



(No. 43)

事例名	カフェ・デラ・テラ (Café dela Terra)
地域	神奈川県横浜市
実施主体	浄土真宗 善了寺 (住職 成田智信)
活動要約	寺でデイサービスとコミュニティカフェを展開
主な分野	「介護・ケア」・「憩い」・「学習」・「世代間交流」
主な関係者	スタッフ：13名 (内訳：代表を含め、男2名、女11名、60歳以上5名) サポータースタッフ：6名 (内訳：男3名、女3名、60歳以上3名)
キーワード	地域に開かれた寺／デイサービス／コミュニティカフェ／茶堂

## ■活動の経緯と活動概要

### ◆基本的考え方

- ・旧東海道の戸塚宿ある善了寺の3代目。祖父がお寺で音楽コンサートや映画会をやったことを、門徒が覚えている。
- ・仏の教えにもとづいたお寺の在り方をつねに考えてきた。み仏の「平等の慈悲」を基本とする思想が大切。
- ・現前の事実＝正見（しょうけん）を見据えることが基本。現実の苦しみをいかに越えてゆくか？



### ◆宗教法人としてデイサービスを開始

- ・6年前、介護保険制度に着目した。宗教法人として「制度」に乗ってやっていけないのではないか。
- ・制度に乗らないで善意やボランティアでやると、安全性・リスク問題に対応できない。
- ・行政（区役所）や町内会の協力・指導を得ながら、お寺でやる介護とは何かを考えてきた。
- ・「土徳」（どとく）という言葉がある、その土地に沁み込んでいる徳、すなわち、自然、まち、空気、歴史等がお寺にはある。

- ・当時、事業の認可官庁であった神奈川県からは、宗教法人では前例がないということで、申請時にかなり厳しくチェックされた。
- ・三好春樹氏に「関係障害論」という本があるが、認知症も関係性障害の結果である。人と自分自身とのかかわりがうまくいっていないからである。(おばあちゃんをベッドで孤食させるのではなく、コタツで家族と一緒に食事できるようにする技術が必要)
- ・お寺は、関係性を豊かにできる場所である(お経が流れる、お寺の檀家がボランティアでやってくるなど)。

#### ◆カフェ・デラ・テラ

- ・お寺と社会とのつながりを常に考えてきた。平安時代までのお寺は、貴族や上流階級のためのものであり、死は穢れであった。お寺が葬式にかかわりだしたのは、鎌倉以降である。
- ・戸塚には明治学院大学があるが、大学生が町づくりに参加していないのはおかしいと思っていた。
- ・戸塚に住む門徒で、スローライフで有名な辻信一氏(明治学院大学教授)から、お寺はカフェではないか、交流の場であり、コミュニティの中心であるべきと指摘された。
- ・2007年からCafé dela Terraを立ち上げ、様々のワークショップやイベントを開催している(冬至と夏至のキャンドルナイト、ヨガなど)。Terraはラテン語の「大地」と「寺」の両方のかけ言葉である。
- ・イベントは地域商店街と連携し、多世代交流を基本としている。

#### ■今後の展望

- ・四国や中国地方に「茶堂<sup>1</sup>」というものがあつた。三方吹き抜けの小さなお堂で茶を接待したことが名前の起源とされる。仏像等が安置され地域住民の信仰と交流の場であるとともに、来訪者と地域住民の交流拠点だったと考えられる。
- ・成田住職は、現代の茶堂をめざして「聞思堂」を建設中である(完成は2012年4月以降)。伝統的なワラ積みを共同作業でやったが、皆の参加意識が高まった。一方的に教えるだけではダメである(松下村塾の精神)。
- ・将来的には、茶堂で結婚式をやるのが夢と、成田住職は語る。

連絡先	善了寺(住職:成田智信) 住所:横浜市戸塚区矢部町125 電話番号:045-881-0348 <a href="http://www.cafedelaterra.org/about.html">http://www.cafedelaterra.org/about.html</a> (Café dela Terra) <a href="http://www.zenryouji.jp/">http://www.zenryouji.jp/</a> (善了寺)
-----	---

<sup>1</sup> 久田邦明「生涯学習論」に「茶堂」の歴史と現状が詳しく紹介されている。

(No. 44)

事例名	カフェ型保健室しらかば
地域	熊本県熊本市
実施主体	NPO 小町ウイング
活動要約	学校の保健室のように気軽に立ち寄れる健康管理の場を地域に提供する
主な分野	「コミュニティカフェ」・「福祉」・「見守り」
主な関係者	運営者：NPO法人小町ウイング会員 カフェ利用者：地元の中・高齢者など約15名、
キーワード	カフェ型保健室／健康管理

## ■活動のきっかけ・経緯

- ・実施母体である地域づくり団体「小町ウイング」は、水枯れの問題を抱えた地元の史跡「小野の小町泉水公園」を、市の助成を受けて花公園にして観光地化するために設立されたが、約1年半で頓挫した。
- ・工藤明美さん（現特定非営利活動法人代表）は、当時、ボランティアのひとりとして参加していたため、この活動を今後どうするつもりか聞きにいったところ、逆に代表を引き受けることになり地域づくり団体小町ウイングを引き継ぐことになった。
- ・工藤代表は保健師・看護師・介護支援専門員等の資格を持ち、市の嘱託として約5年間地域診断に従事し、今の介護保険の前身である老人保健法による訪問指導の後に福祉教育や看護教育、訪問看護ステーションの管理者、福祉第三者評価や外部評価の経験を持つ。この経験の中で、地域住民の健康やコミュニティの再生に限界があるという実態が見えたと話す。
- ・この経験による問題意識と特定非営利活動法人代表という活動の場を得たことで、NPOの活動のひとつとして「新しい福祉の形」を構想し一歩を踏み出すことになった。
- ・住民の健康管理は、行政や医療機関でも行われてきたが、それらは健康管理をするために設けられたツールとしての存在といえる。「しらかば」の活動ではこのツール性を感じさせない中で健康面や地域住民とのつながりを自然体で行うことで予防や健康維持という「新しい福祉の形」を目指している。

## ■活動内容

### ◆活動の概要

- ・カフェ型保健室「しらかば」は、学校の保健室のように気軽に立ち寄れる健康管理の場を地域に提供するもので、週1回（木曜日）午前中、利用料200円で参加した人たちとティータイムを楽しむ中で健康管理がおこなわれる場である。この場に保健師や看護師等の専門スタッフが同席し、その日の様子を見ながらそれとなく問診や血圧測定などが行われる。参加する人は続けてくる人がほとんどで、参加者の健康管理を継続的におこなうことが出来ている。現在、継続的な参加者は10～15名程度である。
- ・この場所は水曜日と日曜日以外は開けており、普段に立ち寄る人も多い。
- ・「しらかば」は「特定非営利活動法人小町ウイング」の活動のひとつで、NPOとしては他にも色々

ライしている。

- ・特産のスイカを使って地域に人の目を集めるための当団体が企画した「スイカでハロウィーン」はスイカ農家への支援もあって、4回目（4年目）くらいから町が動き出し、今では「すいか祭りイン田原坂」の祭りとなっている。
- ・うまくいかなかった例もある。たとえば、子連れでも出来る仕事の提供を目指したパソコン事務の計画では、ごく安い報酬でもやりたいという人もいたが、場所の確保が折り合わず断念した。
- ・今は「しらかば」の参加者の中に、ダンスで眠っている羽織などを使って面白い洋服などを作る人がおり、うまくいきそうな感じがあって、事業化出来ないか模索中とのことである。



＜専門スタッフがそれとなく介入する＞

＜心が和み賑やかさも増す＞

#### ◆活動の特色

- ・「しらかば」には様々な人が集まっている。たとえば、かつては活発にボランティア活動をしていたが体力の低下と共に元気がなくなった人、転勤してきたが伴侶をなくしてひとりになった人、まだ介護施設には入れない高齢者などである。また、工藤代表は、「介護する人」のケアの必要性が大きくなっているとも話す。「しらかば」はこれらの人達の安息の場でもある。
- ・参加者のひとは、「工藤さんと知り合うと色んなことを知ることができてうれしい」と話す。

また、「しらかば」ではティータイムの団らんの中で、その人がこれまでに身に付けてきた知識や技能を引き出し、みんなで認めることに注目している。



認知症の改善等がみられ日常生活の質が上がるということである。特に自信のもてる知識や技能が大切とこのことで、たとえば現在の参加者では、Mさんは作詩、Tさんは中国語の歌や話題、元炭鉱にいたおばあちゃんは炭鉱の話や炭鉱節などである。他に紙ヒコーキ作りや充実した地元の歴史の知識（ボランティアガイドに活かしている）などもある。

＜受賞の報告をする参加者＞

- ・「しらかば」への参加のいきさつは多様である。参加したいと自ら来たMさんは子育て支援活動で「しらかば」を知っていた娘さんに勧められた。Tさんは奥さんに連れられて来て、その後は進んで来るようになっている。元炭鉱にいたおばあちゃんは目が悪く、「しらかば」の近くに10年も住んでいたが工藤代表も気づかなかった。たまたま、その家族の人のある手続きを手伝ったことで家族と知り合いになり、次いでおばあちゃんも来てもらった方が良いと感じ誘った。

#### ◆工藤代表の輪郭

- ・工藤代表は熊本県の生まれではあるが現在の活動拠点である植木町の出身ではない。隣接する市で約15年の在住期間を経て17年前に定住すべく移り住んでいる。植木町からみればよそ者であるが、却って地域の資源を発見できやすかったと話す。
- ・工藤代表は市の囑託として住民のねたきり老人の訪問指導に従事したとき、ストレスで入院するほどに「やり過ぎるくらいやった」と話す。
- ・工藤代表は、「あっち向いている人」を「こっちに向かせる」のが好きだという。また、元来の性格は「引いて溜めこむタイプ」だとも話す。

#### ◆運営上の課題

- ・活動の広報について、現在「しらかば」が所在するグリーンタウン65世帯への回覧の他は口コミによっている。チラシなどはあまり効果がないという。以前には図書館にチラシを置いてもらったこともあるが費用がかかるだけで効果が見えないので止めている。またグリーンタウンへの回覧は、新興住宅地のため各戸に縁側がなく直接の声かけが出来にくいと、自治会から印刷費として年1万円の支援があるため継続している。
- ・活動の財源について、この種の活動では運営費の捻出に苦労があり、工藤代表は助成金に期待を寄せていると話す。しかし、行政の助成は縛りが大きく使い勝手がわるいので避けている。以前もコピー機が買えず残念だったという。さわやか福祉財団やグリーンコープの助成金は使い勝手がよく、また、利用経験はないが日本財団の助成は大きくて良さそうと話す。
- ・現在の規模を維持するだけなら年200～300万円、規模の拡大や活動内容の発展などを視野に入れても300～500万円が運営費として使えればなんとかなるので、地域限定の福祉向上活動であることを考えると、使い勝手を良くした市町村の助成が充実してほしいと話す。行政では出来ない「地域の困っている人をきめ細かく支えること」が比較的低額な財源で実現できることになるという。

#### ■課題と今後の展開

工藤代表は、今後の課題と展望について以下のように語る。

- ・今後の活動課題として、訪問看護の必要性を感じており、訪問看護ステーションや在宅生活支援センターを目指す必要に迫られる。手続きが簡便であることが願われる。
- ・現在の「しらかば」は手狭になっており場所を拡大したいという。現在自宅の一部を開放する形となっており、若い人には隠れ家的で良いと言う人もいるが、高齢になると自宅に伺うのは悪いとの感覚から遠慮があるようだという。今の「しらかば」はまだ事務所的な感じがありこれを無くしたいとも

言う。もっと「自由にしていよいよ」といえる場にして我が家の感覚で過ごせ、たとえば、寝ころんでもよい場にしたいと言う。この方向に向けて「しらかば」をコミュニティカフェ化すべく場所探しを進めている。

- ・ 公民館を使っていとの話をいただいているが、公民館を運営している人はその立場から上から目線とならざるを得ず、そのスタンスが活動の趣旨と違いすぎて今のところ利用できる状況にはない。
- ・ 更には、もっと広い施設を確保し、より多くの人が集まれる【カフェ型保健室】を展開していくことが目指す方向である。



<新しい場所を見定める工藤代表>

連絡先	特定非営利活動法人 小町ウイング（代表理事 工藤明美） 住所：熊本県熊本市北区植木町岩野865-39 電話番号：096-273-4737 メール：uingnomori@nexyzbb.ne.jp
-----	---